

# モンスターハンターの 料理番

真紅マフラー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ポツケ村にあるアイルーキッチン。ここではモンスターハンターと呼ばれたハンターのもとで料理をしたアイルーたちが自分の店を開いていた。

ポポ肉ステーキからガノトトスの造りまで何でも用意します。そんな料理アイルーたちの日常。

# 目次

第1話	1
お品書き	8
くすき焼き	8
【番外編】 我らの団のモンスターハンター	18



# 第1話

## ポツケ村観光案内

太古より溶けること無い雪で覆われた《フラヒヤ山脈》にあるポツケ村。ここは良質な氷結晶や雪山草が採れるフィールドとして有名だ。今までは交通の便が悪かったり、雪山に現れるモンスターが凶暴なものばかりで、無事に村に行くことが出来なかつたりしたが、村専属のハンターのおかげでかなり行き来することができるようになり平和になった。

この専属ハンターの活躍は非常に有名だ。轟竜・ティガレックスとナルガクルガの生体レポートをギルトに提出し、対処法が解明された。また数々の古龍を撃退、討伐をしドンドルマをモンスターの脅威から救うこともあった。

そんなハンターに憧れてポツケ村を訪れる者が多くなつた。

村の村長は言う。

「いつの間にか昔みたいになり人が行き来することが増えて賑やかになったねえ。こんなに村が賑やかになったのもハンターさんのお蔭だね」

村専属のハンター。彼に話を聞こうと思つたが、彼は村を出て旅に出たそうだ。彼の

ことを詳しく知るネコートさんは言う。

「彼は無謀で、気まままで変わり者で、誰よりも狩人らしかった」

それを知ってもこの村に来るハンターは多い。1つはこの村の鍛冶屋の武器を購入するためだ。

G級装備を一発生産する技術を持っている鍛冶屋に自身の装備を強化してほしいハンターが訪れる。

鍛冶屋の主人は言う。

「ハンターさんがいつも村のために傷だらけになって戦うのを見て、ハンターさんの力になりたいと強く思って何とか強い武器装備を作れないか必死に考えて試行錯誤した結果、G級装備を一発生産する技術を開発したんだ。まあ、ハンターさんが村を平和にした直後だったからハンターさんが一発生産の武器を使うことは余り無かったがね」

この武器を購入するためには厳しい条件をクリアしなければならぬ。ポツケ村のクエストをクリアして認められたハンターのみが購入できる。

「ぜひ武器装備の強化、生産は当店で！」

もう1つは村にあるアイルーキッチンで食事をするため村を訪れるものがある。

「アイルーキッチン 狩人庵」

もともとは村専属ハンターのキッチンアイルーだった彼らが、自分の料理を多くの人たちに振る舞いたいと思い、ハンターに許可を取って開いたお店だ。

スポンサーは村専属ハンターと妹ハンター、村の鍛冶屋だ。

ハンターの自宅の裏側にあるお店は、大きなマカライト鉱石の原石を眺めつつ、雪山を見ながら食事ができる。ハンターが好んで食べていた食事や、農場で取れたキノコや魚などをふんだんに使った懐石料理など様々だ。

二代目料理長のギルバートは言う。

「ハンターさんはもともと料理が好きだった御方ニヤ。いろんな食材やら素材やらでいろんな料理を作ったニヤ。アオキノコの Pasta からティガレットクスの竜田揚げまで様々ニヤ。今は、ハンターさんは旅に出ているけど、たまに帰ってくるからもしかしたら一緒に食事をできるかもしれないニヤ。村の温泉を楽しんで食事するのもよし、狩りの前に気合入れて食べるのもよし。ハンターさん達にはよろず焼きサービスもやっているニヤ。狩りに行く前に生肉や魚を用意してくれればG級並の旨さに焼いておくニヤ。とにかく御来店楽しみにしているニヤ」

ポツケ村が熱い。ぜひ来てみてはいかがだろうか？

「姐さん、食事が出来たニヤ」

月刊誌狩りに生きるの最新刊に兄貴のイルーたちが作ったお店の取材記事が載ると言うことで読んでいたら声がかかった。

「ん、わかった。行く」

本を閉じてベッドから起きて食堂に向かう。兄貴のペットのプーギーも一緒に着いてくる。

私を呼んだのは最近調理場に立てるようになったキッチンイルーのココロだ。イルーキッチンでは食事を運んだり掃除したりと雑用をしてからようやく調理場に立てるようになる。人間顔負けの職人気質だ。別に兄貴がここまで厳しかった訳でも無いし、私もここまでしろと言っただけではないが、彼らが好きでやってるならしょうがない。「ココロ、頼んでた生肉焼けた？」

「ニヤ、それなんですけど、まだまだ自分は上手く焼けてなくて、1つはコゲ肉にしてしまったニヤ」

「そう、別にいいよ。生焼け肉は調べて強走薬にするから大丈夫。わざわざありがとう」

「ニヤニヤニヤ〜!!なんてホワイトな職場ニヤ〜!!」



感激しているココロを苦笑しながら旅に出ている兄貴のことを思う。

「兄貴だったら焦げていても味がよければ食うけどな」

以前毒テングダケを使ったパスタを作っていて、食べようとしていたこともあった。兄貴の食事番のリユートが全力で止めていたことがあった。

「ご主人、何やってるニヤー!!」

「パスタを食おうとしてた」

「それは見て判るニヤー!!毒テングダケは毒があること知っているハズにや!」

「ああ、だがウマいかもしれんぞ?」

「辞めるニヤ、死んでしまうニヤー!!」

「そうか、……だが、食わせて頂くぜエ!!」

「ニヤニヤニヤ〜!!姐さーん、助けてニヤー!!」

リユートは兄貴と旅に出ているから今頃食事を作っているかもしれない。いや、辞めると叫んでいるかもしれない。あんなやりとりしているから、今回の記事のネコートさんの答えが、無謀で変人と言われる訳だ。常時火事場が発生しているような兄貴が毒キノコ食って死ぬとは思えないけど。

「今日は姐さんはクエストありますかニヤ?」

「ん、今日は夜から密林でドスランポスを狩ってくるよ。朝には帰って寝るから、昼飯に

起こしてくれればいいよ?」

「分かったニヤ、また良ければお肉焼いておきますニヤ」

「うんお願いね」

そうこうしているうちに食堂についた。

「イラツシャイマセ!!」

記事に二代目料理長と書かれたギルバートが挨拶をしてきた。

「おはよ、お疲れさま。これに載っていたよ、時間空いたら読みな」

「ありがとうございますニヤ。今日は幻獣チーズをふんだんに作ったグラタンをメインに用意したのニヤ」

「わあ、幻獣チーズ好きだからうれしいな。それじゃ頂きます」

テーブルに用意された料理を見る。

ココットパンにアプトノスープ、幻獣チーズグラタンにクックサラダ。今日は洋食ラ  
ンチだ。

「あむ、んぐんぐ。……ゴクツ、んまい流石だね」

「ありがとうございますニヤ、それにしても思ったより書いてないですニヤ」

「まあ、ポツケ村観光案内だからね」

「わざわざ仕込み省いてインタビュー受けたのに残念ニヤ」

「大丈夫、ドンドルマで兄貴におごってもらったレストランよりうまいから自信持ちな。モンスターハンターの料理番なんて早々出来ないよ?」

「まあ、そのモンスターハンター様が旅に出ている訳ですが」

「まあね、ギルトの最終兵器だのモンスターハンターだの言われて毎日頼られたら旅に出たくもなるさ。ちよくちよく帰ってくるだろうからその時もおいしいご飯頼むよ」

「ニヤ、了解ニヤ」

今日は狩人庵は定休日。明日はいろんな人たちがくるのだろう。そう思いながら私は食事を楽しんだ。

## お品書き　　くすき焼きく

ポツケ村の集会場。ここには3人の受付嬢がいた。真ん中のテーブルではよそから来たハンターたちが酒を飲んでいる。先ほど上位ティガレックス二頭をクリアして帰ってきた。

受付嬢は姉妹でやっついていて、G級は長女、上位は次女、三女が下位を担当していた。ギルドマネージャーはドンドルマへ出かけているため不在だ。

「ふぁーあ、お腹すいた」

「姉さん、眠いのかお腹すいたのかどっちですか？」

「はやく狩人庵に行きたいね」

真ん中でハンター達が酒飲んでいるため、彼らが帰った後に帰らないといけないから3人はなかなか帰れずにいた。

「おいこら、ここで呑んでないで居酒屋で呑みな」

そんなとき一人の女性ハンターが言った。装備はキリン装備でナルガの双剣を携帯していた。村の専属ハンターである。

「おつ、きれいな姉ちゃんここに座って呑みな」

「あ？捌かれないの？」

兄貴譲りの殺気だったハンターの目で酒飲みハンターたちの肝を冷やす。それにビビった彼らはそそくさと席を外して集会場を出ていった。

「まったく、片付けも出来ないのかよ」

呆れながらクエストクリアの報告をしにG級クエスト嬢の元へと行く。

「はい、ナルガクルガ二頭のクエストクリアしたよ。片方討伐、片方捕獲ね」

「お疲れさまです。追いついてくれてありがとうございます、助かりました」

「ああゆう空気読めない男は嫌いなんだよね。ごめんね、殺気だっちゃって」

「いえいえ、はやく狩人庵に行きたくていきたくて仕方が無かったです」

「姉さんあくびしながら、お腹すいたって言ってましたから」

「コラ！余計なことは言わない!!」

横で済ました表情でさらりと暴露する次女に顔を赤く染めて怒る長女。普通はハンターの前ではプライベートの話はしない掟がある受付嬢だが、村専属ハンターとなると関係ない。互いに信頼関係が出来ているから話せることもあるが。

「今のことはお兄さんには内緒でお願いしますね？」

「内緒も何も兄貴は『いっつもG級の受付嬢は眠たそうに欠伸びしているよな』って言ってたから手遅れですよ」

「そんなあ!？」

受付嬢たちは旅に出ている兄貴のことを異性と意識している。特に長女は気合いが入っていていろいろとモンスターのことを調べてはクエスト受注しに来た兄貴と色々話をしていた。旅に出た後も色々気にかけているようだ。

「それじゃあ今日は三姉妹揃ってお店に来ますか？」

「はい、予定は大丈夫ですか？」

「今日は暇だつて聞いていたから大丈夫でしょ。私も一緒にしても良いかしら？」

「ウンツ!!今日の食事は女子会だね!!」

「そうだね、それじゃ先に行つて待つてるよ」

ハンターはそう言うと自宅に向かつて行つた。

本日のお客様

ポツケ村集会所の受付嬢三姉妹。

「今日は珍しく暇だニヤ」

調理場の板場に片腕で寄りかかって言うのは、アイルーキツチン狩人庵の二代目料理長のギルバート。明日は昼のランチでは弁当が50人前と予約が入っている。嵐の前の静けさと言ったところか。

「昨日もランチのみで夜はほとんど無かったニヤ」

煮方のトムがツカミダコの煮付けの味を確認しながら答えた。

こここの調理場は役割がしつかり決まっている。

料理の盛り付けをする『盛り付け』から始まり、ある程度仕事がこなせるようになってきたら『焼き場』をやる。焼き場は魚や肉の串焼きから塩焼きからステーキまで色々ある。

それもできるようなったら『揚場』になり、唐揚げや昼のランチで多く注文される天ぷらや天丼を任されるようになる。次に調理場の二番手となる『煮方』。ここまできると、献立や仕込みの指示をするようになる。煮物や寒くなるとおでんなどを作るようになり、店の経営方針などにも口を出せるようになる。

最後は『板場』。よく板前さんと言うが、ここに立つ者のことを指す。魚を捌き、刺身などを用意する。店の全責任者。つまりこここの店では『モンスターハンターの料理番』と呼ばれることになる。

さて、今板場のギルバートと煮方のトムが話をしているが、その下つ端の盛り付け、焼

き場、揚場の担当は何をしているかと言うとのんきに話をせず明日の弁当の仕込みをしていた。

先も言ったが、弁当50本はそう簡単にその日の午前中に出来る量では無い。前日にほとんどの素材に包丁を入れなければ全然回らない。盛りつけの担当のココロは明日の弁当の刺身のツマを剥いている。焼き場のマイケルはポポのタンに塩コショウを降り味付けしてトレイに並べて冷蔵庫に閉まっていく。揚場の担当のテリーは海老の背わたを串を使って抜き、粉をかけて明日すぐ揚げられるようにしていく。

弁当と言ったが、そこら辺の弁当屋さんで販売されているものとは違う。値段も10倍に跳ね上がっている。

正方形の木箱に十字の仕切りを入れて四つの部屋を作る。そこに小皿をはめて、酢の物や煮物。揚げ物やら刺身まで詰め込み、ご飯と香の物。それと赤出汁を提供する。クエストが連続して忙しいときにハンターに簡単に、尚且つちゃんとした食事と先代料理番のリユートとギルバートが考案したランチだ。

ただし今が暇だから今のうちにやっているだけで、忙しい時は、夜の営業をやっている。だから、遅いときは仕込みのせいで日にちを跨いで深夜1時に終わるのが普通だ。

「おい、ココロ。姐さんから頼まれた肉焼いてあるのかニヤ？」

焼き場のマイケルが明日の仕込みを終わらせて自分の後輩であるココロに聞いた。



ココロは仕込みやら雑用やらで一杯一杯だったのですっかり忘れていた。

「やってないニヤ……!」

「馬鹿だニヤ」

ぼそりと呟いたマイケルは興味なさそうに次の仕事に取りかかった。

「ニヤ、ニヤ、ニヤ……どうすればいいニヤ!? 今から焼き場使わせてもらってもいいですかニヤ!」

「ダメニヤ」

マイケルの無慈悲の一言でココロの精神は一気に削れた。

「そんなにやあ!」

「お前は馬鹿だニヤ。まだ夜の営業が終わってないのに焼き場を貸せるわけ無いニヤ」

「そこをなやんとか!」

「おい、どうした?」

ふたりのやりとりを気になってギルバートが入ってきた。

「こいつが姐さんに頼まれたこんがり肉を焼くのを忘れていたのですニヤ」

「ニヤア!? おめーなあーにやってるニヤー!!」

「す、すいませんニヤー!!」

ギルバートの剣幕にココロは両手を合わせて謝るしか無い。

「姐さんから頼まれたことをすつぽかすとかふざけてんじゃねーぞ!!」  
「あたしがどうかした?」

姐☆さ☆ん☆登☆場☆♪

このタイミングで姐さんこと妹ハンターが調理場に来るとは誰も思っ  
てなかった。  
でキツチンアイルー一同絶句してしまった。

「ここに来たら誰もお客さんいないしちよつとギルバートに用があつて来たら怒鳴つて  
るしでどうかした?」

「いや、失礼しましたニヤ。実はココロが姐さんから頼まれたこんがり肉を焼くのを忘  
れていたのですニヤ」

「すいませんですニヤ」

「別にいいけど?次から気をつければ良いじゃん」

あつげらんかんといい妹ハンターにギルバートはいう。

「しかし我々は『モンスターハンターの料理番』と呼ばれる身。ご主人に迷惑かけるよう  
なことはあつてはならないと思いますニヤ」

「知らないよそんなの。そんなこと気にしたら兄貴なんて迷惑掛けつぱなしだよ?私や  
兄貴はこんがり肉焼くの忘れただけで怒つたりしないよ?ストックならまだあるし。  
それより、お客さん連れてきたから準備できる?」

「ニヤ、何名様かには？」

「受付嬢三姉妹と私。今日のお薦めは？」

「ニヤ、今日はすき焼き会席がお薦めですニヤ」

「相変わらずクオリティ高いよなあ。分かった、じゃそれでよろしく。あと少しココロ借りて良い？」

「どうぞ。……おら、行くニヤ」

「ニヤ、姐さん」

「ふふっ、何泣きそうな顔してるの？渡したい物があるだけだから」

ココロを連れてハンターは自室に移動した。

「ニヤ、自分を解雇して欲しいにや」

「まあまあ落ち着きなさいって、真面目過ぎるんだよお前は。さっきも言ったでしょ、渡したい物があるって」

ガサゴソとアイテムボックスを漁りながらハンターは肉焼きセットを探す。

「あつた！よし、これをあげるよ。これで肉焼きの練習しな」

「ニヤ、これは？」

「これは？って見て分かるでしょ肉焼きセット。大方マイケルが調理場の肉焼きセットを貸さなかつたんでしょ。意地悪な職人の真似事までしやがって、全く。これ使つていだから肉焼いておいてね。後辞めるなら兄貴に言つて、ココロを雇つているのは兄貴なんだから」

「ご主人には会つたこと無いですニヤ」

「ふふん、そんな君に朗報だ」

そう言つてハンターは一枚の紙を差し出した。そこには

『我らの団のみんなが狩生き呼んでポツケ村行きたがっているから皆引き連れて帰る』

「こ、これは？」

「兄貴帰つてくるつて。挨拶できるよ、やったねココロちゃん、家族が増えるよ」

「何か言つてはいけない台詞が入っているニヤ!!」

そんなこんな話していると玄関から声がある。

「こんばんはハンターさん」

「おつ、来た来た。」

受付嬢三姉妹がひよこり顔を出して。

「ほらココロ、飯の準備準備!!今日は呑むぞー!!」

近いうちにキツチンアイルー狩人庵を中心に祭り騒ぎが起きそうだ。そう思いながらハンターは食堂へと向かっていった。

## 【番外編】 我らの団のモンスターハンター

シヤガルマガラを討伐して3日後、バルバレに泊まっているキャラバン『我らの団』。そこで派遣キルド受付嬢のソフィアはせっかくの休暇だというのに、浮かない顔をしていた。

「ハンターさんが爆睡中です」

私は趣味の一つである人形作りをしなごらため息をついた。

団長のアイテムの謎が解け、新たな旅のスタートを切る前に故郷に帰ったりするのも必要だろうと5日間の休暇をとって、キャラバンの皆はいったんばらばらです。

キャラバンにいるのは私とハンターさんのみ。ハンターさんはポツケ村には帰るのが面倒くさいと言ってキャラバンに残りました。私はギルドの仕事や本とか読みたいので残りました。本当はハンターさんから色々とモンスターのこととかお話ししたかったのに、とほほ、残念です。

休暇2日目。ハンターさんは一日中寝ています。未知の古龍と言うこともあって、

キャラバンに入って用意した防具じゃなくてポツケ村から取り寄せた武器防具でシャルマガラと戦いました。本で読んだことのある金獅子の防具と、ハンターさんとずつと共に戦ってきた太刀の究極系。名前は、えつと……「天上天下天地無双刀」でしたっけ？そんな感じの名前でした。ハンターさんは『三天』って言っていました。加工屋のお兄さんも娘ちゃんも見たこと無い素材で出来ている刀だと言っていました。ますますハンターさんの謎が深まるばかりです。

そんなハンターさんの生態ですが、分かっている事があります。食べる事が大好きだということですよ。

ハンターさんにケチャワチャの狩猟クエストを紹介した際、モンスターの特長よりも『味』を聞かれました。食べたことも無いし、食べることもすら考えていなかったので分からないと素直に言ったら『そうかあ』と物凄く落ち込んでいました。

ハンターさんにとつて味は一番の特徴らしく、モンスターの事を私が聞くとまず第一にウマいかマズいか教えてくれます。ポツケ村から一緒のオトモアイルーのジャックとキツチンアイルーのリユートがその度毎回鋭いツツコミを入れていきます。

「ポツケ村に行ってみたいなあ」

ポツリと気がついたらそんなことを言っていました。ハンターさんの故郷でつかいマカライト鉱石の原石があつて、温泉もあります。ハンターさんの家ではキッチンアイルーたちがレストランをやっているようですし、加工屋は独自の製法でG級武器を一発生産できるようです。

……あれ？よく考えたら次の冒険場所はポツケ村が一番良いのではないのでしょうか？

ハンターさんは故郷に帰れるし、加工屋のお兄さんはG級装備一発生産の技術を知ることが出来るかもしれません。ハンターさんのG級武器防具があるから加工屋の娘ちゃんも喜ぶこと間違いなし。

団長さんは……トレジャーハンターでもやつてれば良いんですよ！

そうと決まればポツケ村に詳しい我らのハンター<sup>ババ</sup>さんを起こさなければなりません。ハンターさんは頼もしい姿は地平線の彼方へと飛ばして、今はベットで捕獲されたババコンガみたいに寝ています。お腹丸出しでいびきをかきながら起きてません。ぼっこりのお腹じゃなくてバツキバキに腹筋割れていて少しセクシーなのがむかつきます。

ハンターさんは寝ると緊急時以外はちよつとやそつとじゃ起きません。以前音爆弾で起こしてみたらドスガレオスのように跳ね起きました。そしてナルガクルガのように怒り、クエストではイビルジョーの如く暴れたそうです。……おかげでゴア・マガラ



のクエスト失敗して行方不明になってた筆頭ランサーとルーキーさんが助かったのでよしとしましょう。「前門のゴア・マガラ後門の激昂ハンターだったっス」とルーキーさんが青ざめた顔で言っていました。

話が逸れました。それでハンターさんを起こす方法はご飯の匂いで起こすのが良いとアイルーたちから聞いています。それを実行しようと思います。

しかし私は料理は軽いランチくらいな物しか作れません。それでもアイルーのリユートがハンターさんの好きな焼肉のタレを教えてくださいましたので大丈夫です！これがあれば私にも勝機があります！

そんな風に思ってた時がありました。



目が覚めると私は煙の中にいた。何を言っているが分からねえと思うが私も何を言っているのか分からない。

おっと、名を名乗って無かったな。私は『我らの団』のハンターをやっているシユウだ。よろしく頼む。さて、『モンスターハンター』と呼ばれる私だか、今まで奇妙な体験をしたり、御伽噺に出てくるようなモンスターと出会ったりしたが、今現在起きていることは過去に経験したことのない出来事だ。

シヤガルマガラを討伐して団長殿が我々に休暇を与えて早2日。久々に死ぬ気の本気を出したので疲れて寝たいのだが、何か焦げ臭いと思い起きたら、部屋が灰色の煙に包まれていた。

キッチンアイルの失敗か?と思ったが、ユクモ村にいる馬鹿弟子のところに温泉旅行に行っているからそれは無い、それじゃあ犯人は。そこまで考えると聞き慣れた声でした。

「えっ、あれっ、どうしてこうなるの!？」

ソフィアか。

「やれやれだぜ」

「おい、人の部屋で何やってんだ」

「あつ、ハンターさんおはようございます!」

「のんきに挨拶してんじやあねえぜ。これじや軽く小火騒動だ」

「ええとツ、本日はお日柄も良く!!」

「落ち着け、いったい何をしたんだ」

わたわたとあわてるソフィアの手元を見ると暗黒物質と化したフライパンがあつた。

ふむ、料理と言うより調合だな。しかも失敗して燃えないゴミとなっている。例えるならトラップツールとネットを失敗したあの残念な感じ。

「何やってんだ?」

本日二回目の問いにソフィアは恥ずかしそうに言った。

「リ्यूートがハンターさんは美味しい匂いで起きるって言っていましたから」

うん、そうだ。それは認めよう。だかしかし。

「そう……。いのちの危機を感じて起きたんだけどな。まあ良い、ヤケドしてないだろうな。水で冷やしてウチケシ食えよ、それで治るから」

とりあえずうちわを両手持って鬼神化。乱舞をやって煙を一気に吐き出す。おおうじやねえよ、てめえのせいだろう。はあ、疲れた。私は太刀使いなんでね、双剣は妹の専門だ。それにハラヘッタモードに入ってしまった。さて、飯にしますか。

「飯は私がやるから、君はコーヒーを用意してくれ」

「はいー」

うれしそうに言いやがって、飯が食いたくて勝手に来たのかよ。飯と言っても軽いサンドイッチだがな。あと、フライパン弁償な。

氷結晶を敷き詰めた冷蔵庫からシナトマトとモスハム。それと大砲レタスを取り出し、ココットパンにマスタードとマヨネーズを塗って挟んでいく。一口サイズに包丁でカットして皿に盛り付ける。今日はデスクワークになるからガッツリ食わなくても大丈夫だろう。女の子のソフィアでも食べられる量だ。

「ほら、できたぜ。コーヒーはまだか」

「うええつ、なんで!?速くないですか?」

「調理場を制する者は狩り場を制すつてな」

「なに格好つけてるんですか?さっきまでぐーすか寝てたくせに」

「不法侵入した奴には飯はなくていいな」

「あつ、すいません本当に。だからご飯!!」

「つたく、調子の良い奴。」

「頂きます」

「……頂きます」

私はコーヒーを一口飲んでサンドイッチを口に入れる。大砲レタスのシャキシャキとした食感がたまらなく美味しい。たまには自分で作るのもいいな。

ソフィアはニコニコとサンドイッチを頬張っている。適当に作った奴だが、美味そうだなにより。悪い気はしないな。

さて、今日の予定はと考え始めたところで一匹の鷹が入ってきた。

「んぐ？何でしょう」

「むう、この鳥は」

右足には紙が巻いてある。解いてみると短く文章が書いていて、ギルドナイトの印が押してあった。

『巨大龍の進撃あり』

「なるほどね」

紙をくしゃくしゃに丸めてお湯を沸かしている囲炉裏に投げ込んだ。これで誰も見ることはできなくなった。

「どうかしたんですか？」

「ん、村からの安否確認」

鷹にモスハムを与えて放しながら言った。

「へえ、って、それです！」

コーヒーカップに手を伸ばした時に、突然ソフィアがバンツ！テーブルを叩いたもんだからコーヒーがはねて手の甲に当たった。

「熱ツ!!」

「それです！ポツケ村です！」

「はあ？んだよもう」

「我らの団みんなでポツケ村行きましょう！」

「何でだよ、ドンドルマならわかるけど」

「これです！」

ソフィアが私に見せたのは『月刊・狩りに生きる』。それにポツケ村が載っていた。

ふむふむ、なにになに？あれ、何で私の家が載ってるんだ？『モンスターハンター』の料理番？うわめんどくさい。

「えく……」

「いいですか、ハンターさん。村からの安否確認が来たと言うことは、1回帰ってこいと  
言っているようなものです！それにポツケ村に行くことは我らの団にとって得になり  
ます！」

「そうか？」

「加工屋のお兄さんにG級装備の技術を勉強するいい機会だし、加工屋の娘ちゃんはハンターさんの防具を見れるじゃ無いですか」

「まあ、そうだな。行商の爺さんには俺の素材を売って貰えばいいし、団長殿はトレジャーがある」

「さつすがハンターさん！その通りです！」

「ならば団長殿に聞いてみなければな、許可してくれるだろうか？」

「大丈夫ですって。さて、交渉交渉」

「んじゃ頼んだ」

「エツ、私がですか?!」

「当たり前だろ、武闘派なんだよ私は。」